

でも過言ではない。通勝の代表的な著書としては第一に岷江入楚を挙げなければならない。岷江入楚は河内本、河海抄始め前人の註釈書を網羅しそれに自己の註釈も加え集大成したもので源語については現在においても最上の註釈書として用いられている。ほかに源氏物語聞書、中院通勝記、歌書には詠歌大既の註釈書、百人一首抄などがある。

通勝の嗣子通村（天正16年一承応2年
1588-1653）および孫通純（慶長7年一承応2年
1612-1653）は通勝の学風を継承しやはり正統源語学者として国学界に重きをなしていた。また通村は歌道にも長じ当時並ぶものなき名手でありその上世尊寺流の能筆家として世に知られていた。通村の著書としては通村の講義を通純が筆記したという源氏物語草稿、江戸初期の記録をとどめた塵芥記、歌集には中院通村詠草、中院通村歌集などがある。なお通純には古今和歌集聞書がある。

通勝に始まった正統派源語学も曾孫通茂（寛永8年
1631
二宝永7年
1700）に至って熊沢蕃山の古礼古楽の復興と言う新しい思想の影響を受け、王政復古的な新風をその著書にも講義にも採り入れた進歩学派に移行して行ったのである。通茂の嗣子通躬（二元文4年
1704）も父の学風を継ぎ以後通藤、通枝、通維、通古、通知、通繫、通知と受け継がれ江戸末期にまで及んでいる。そもそも中院家は武家伝奏の家系であり、通茂も役目柄江戸へ下向する機会も多く、江

戸において武家に接触するたびに朝廷の衰微を嘆いていた時でもあり蕃山の思想に共鳴したものであろう。また通茂も通村と同様に能筆家として知られ、その自筆本も流麗な筆致で書かれている。著書としては源氏聞書、蕃山の源氏外伝の異本と称せられ通茂が外伝から道学と音楽を抜き出し潤色したものといわれている源氏御抄、伊勢物語不審覚書のほか一連の伊勢物語註釈書、樗記があり歌集としては和歌の名手としても聞え高く中院通茂歌集詠歌え大概などがあり、また通村、通純、通茂の歌集を合した三槐和歌集もある。さらに、通茂か、一門の人の作といわれるもので源氏物語音楽事の一冊がある。この書は蕃山の思想に影響されたものか源氏物語の籥木、若紫から篝火までの帖より音楽に関係ある部分を抜粋して、楽器の解説も付けそれに私勘、自説などの註を加えたものである。

そのほか文庫の中には歴世の通枝記、十輪院内府記などの日記、当家書法、古今伝授起請文など家学に関するもの、後水尾院歌集、三条西実隆の逍遙院百首、中院第十代通秀の所持していた耕雲明魏自筆本と称せられている仙源抄は道勝に伝わり現在も当文庫中に所蔵されている。

（附属図書館 森島 啓）

医学図書館の開館時間の延長

医学図書館では、昭和57年4月1日より、開館時間を延長し、下記のとおり開館しています。ぜひご利用下さい。

記

平日 午前9時から午後8時まで
土曜日 午前9時から午後5時まで

（但し、日曜、祝祭日、創立記念日および解剖体祭日は休館）